

修学旅行の女湯に全裸で突撃するバカ男子たち

秋の深まりを感じる10月末、山あいの温泉旅館に、とある学校の生徒たちが到着した。修学旅行二日目の夕方、長いバス移動と昼間のハイキングで全員がへとへとになっていた。

男子部屋の301号室は、畳の香りが漂う部屋で、障子越しの柔らかな灯りが部屋を照らしていた。佐藤健太は窓際の座布団に腰を下ろし、オレンジジュースの缶を片手に仲間を見回した。180cmの長身、サッカー部キャプテンの彼は、鍛えられた胸板と太腿が浴衣の隙間から覗いている。

「なあ、お前ら、このまま普通に寝ちまうつもりかよ？」

佐藤の声に、山田大輔が即座に反応した。眼鏡をかけた知的な顔立ちだが、悪ノリが大好きな彼は、布団に寝転がりながらニヤリと笑い、手に持った漫画雑誌を閉じた。「何か企んでるな、健太。またお前の変な企みか？」

「当たり前だろ。修学旅行ってのは一生に一度のチャンスなんだぜ。このまま終わるなんてありえねえ」

部屋の隅で漫画を読んでいた小林翔太が顔を上げ、ぶっきらぼうに「何だよ、今度は？」と尋ねた。中村悠斗は壁にもたれ、色白で華奢な体を浴衣で包みながら、「まさかまた変なことじゃないよな？」と不安げに呟いた。田中一馬は「面白そうなら乗るぜ」と笑い、高橋和真は「健太のアイデアなら期待できる」と静かに頷いた。

佐藤は立ち上がり、浴衣の裾を軽く払って全員を見渡した。「女湯に突撃しようぜ。全裸でな」

一瞬、部屋が静まり返った。窓を叩く風の音だけが響き、次の瞬間、笑いと驚きの声が爆発した。「マジかよ！」「先生に報告されたら死ぬぞ！」「いや、最高じゃねえか？」と6人の声が交錯する。山田が眼鏡を直しながら「どうしてそうなるんだよ」と突っ込んだが、目がキラキラ輝いていた。佐藤はニヤリと笑い、「度胸試したよ。誰が一番ビビらずに行けるか。思い出に残るだろ？」

「確かに一生モノだな」と田中が乗り気になり、小林も「中に入った時点で勝ちだろ」と笑った。中村は「でも...女子に嫌われるんじゃない...」と躊躇したが、高橋が「そんなの気にするな。やらない後悔より、やって大成功だぜ」と背中を押した。

この企みの種は、実は昼間のハイキングで蒔かれていた。山道を歩く中、佐藤は女子グループの後ろを歩いていた。高木美咲が坂を登る時、風が彼女のスカートをふわり

とめくり、白い太腿と淡いピンクのパンツが一瞬だけ見えた。その瞬間、心臓が跳ね上がり、「もっと見たい」という衝動が抑えきれなくなった。夕食時、山田は鈴木彩花がバイキングでソースをこぼし、慌てて拭く姿を見て、彼女の細い腕と小さな胸の膨らみに目を奪われた。小林は松本梨奈の長い脚がテーブル下で揺れるのを見つけ、田中は岡田真由の柔らかな笑顔に、中村は佐々木優香の膨らんだ胸に、高橋は藤田玲奈の童顔に、それぞれ密かな興奮を覚えていた。修学旅行という非日常が、彼らの理性を少しずつ削いでいたのだ。

夜9時、女子たちが入浴している時間に、6人は決行を決めた。佐藤が「準備しろ」と言うと、全員が浴衣を脱ぎ始めた。佐藤の鍛えられた腹筋と太腿が薄暗い部屋で浮かび上がり、山田の意外と引き締まった体が露わになった。小林の毛深い胸が揺れ、中村の華奢な肩が震え、田中の肩幅が強調

され、高橋の長髪が解かれて背中に流れた。全裸の解放感と羞恥が混じり、おちんちんが冷たい空気に触れてピクンと動く。「やべえ、緊張してきた」と小林が呟き、佐藤が「ビビるなよ！ 行くぞ！」と笑った。6人は部屋を出て、廊下の冷たい板張りが足裏を刺す中、女湯へと向かった。